

滅亡論と功利主義

森 真 一

Human Extinction and Utilitarianism

Shin'ichi MORI

要 約

滅亡論とは、人類の滅亡を想定した思想や主張、物語を指す。本稿は滅亡論の一つである反出生主義を中心に分析することをおして、滅亡論が功利主義的価値基準を前提としていること、および功利主義が倫理学説であることを越えて人々の価値基準として自明視されていることを浮き彫りにする。また、人類の滅亡を正当化する根拠としてあげられる気候変動や環境破壊等は、功利主義の社会観と人間観の産物として捉えられ、功利主義的滅亡論がマッチポンプ構造であることを明らかにする。最後に、功利主義を相対化するものとして、実存主義的でヒューマニスティックな学問として社会学を再認識する意義を論じる。

キーワード：滅亡論、ポストヒューマン、反出生主義、功利主義、実存主義、ヒューマニスティックな学問としての社会学

1 みんなの願い

あるひとりの男が商店街を歩いていると、どこからともなく声が聞こえてきた。

「地球のみなさま、こんにちは。私は神の下で働いている者でございます。」

声はこの男にだけでなく、周囲の人たちにも聞こえているようで、街は静まりかえり、みな一様に、その不思議な声を聞いている。

「さて、今度、私がみなさまの脳に直接話しかけることになりましたのは、重大なお知らせがあるからでございます。今度地球は、誕生から宇宙時間の一周期に達しました。これを祝いまして、神が一つ願い事を叶えることになりました。みなさまには本日から一週間以内に、願い事を決めていただきます。みなさまそれぞれ、一週間後に、神に向かって自分の願い事を一つだけ念じていただきます。それを、神以下、私どもが集計いたしまして、一番多かった願い事を一つ、

神が叶えることになっております。』

その日から世界中は大騒ぎとなった。耳の不自由な人にまでこの声が聞こえていたことが判明し、この不思議な声を疑う者がいなくなった。テレビはどの局も、どんな願い事をするかについて放送している。

永久に使用できる安全なエネルギーを与えてもらえるように願おう、いや、地球の緑を回復してもらおうべきだ、いや、世界平和だ……。

議論はテレビだけでなく、学校、会社、スーパーマーケットでも行われた。

そうして一週間が経った。人々はそれぞれ願い事を一つ決め、神に向かって念じた。

「地球のみなさま、こんにちは。私は先日みなさまにごあいさつさせていただいた、神の使いでございます。さて、本日は、以前お知らせしたとおり、神が願いを叶える件につきまして、願いが決定しましたので発表いたします。こちらといたしましては、おそらくいろいろな願いがあるだろうと思っておりましたが、意外とまとまっておりました。それでは発表いたします。今度神が叶える願い事は、人間以外のほとんどの生物の願いである「人間を地球上から滅亡させてください」というものに決定いたしました。みなさま、次の一周期を目指して、地球を大切にしてください。それではみなさま、ごきげんよう。」

そんなわけで、人間たちが最後に聞いたのは、動物たちの歓喜にも似た鳴き声だった。

2 滅亡論を考察する理由

以上は八塚顔高による短編小説「みんなの願い」（八塚、1995）の要約である。この小説を紹介した理由は、滅亡論の主要な特徴がみてとれるからである。滅亡論とは、本稿において、人類の滅亡を想定した思想や主張あるいはそれらを含む物語を指す。

八塚の「みんなの願い」に現れている滅亡論の特徴として、まず人間中心主義への批判的、反省的姿勢がある。

神の使いから人間が「みなさま」と呼びかけられたとき、この「みなさま」とは自分たち人類のことだと人間たちは当然のように考えていた。じつは神の使いは、人類とは異種の生物たちも含めて、すべての生物に「みなさま」と呼びかけていた。それに気づかない人類の傲慢さが、結局、人類滅亡を招いた。このような物語り方からは、人間中心主義への批判的態度や、人類の自惚れを反省する態度が読みとれるだろう¹。

二つめは、ポストヒューマン論的な問題意識である。

気候変動やウィルスの感染などによる人類の滅亡が非現実的ではなくなってきたと現状を認識したうえで、では現在生きて存在するわれわれはどのような選択を行うべきなのか。このように「人間以後」を仮想しながら現在を問うのが、ポストヒューマン論の問題意識だと私は考えている。

その考えが妥当なら、小説「みんなの願い」にも同じ問題意識がうかがえる。というのも、この宇宙の創造主である神から、「みなさん」と呼びかけられた際、この「みなさん」とは「人類」のことだと頭から決めている人類の自己中心性を浮き彫りにし、神のような超越的存在の視点からすれば、この地球上で善く生きようとしているのは人類だけでなく、異種の生物たちも同様であることを人類に気づかせ、現在のような生活様式を続けるなら人類は滅亡しても仕方がない、滅亡したくないなら異種の生物と共存できる生活様式について真剣に考えるべきだ、という倫理的なメッセージが読みとれるからである²。

三つめは、功利主義的な価値基準である。

小説「みんなの願い」において、人類が滅亡させられたのは、全生物の幸福への願いを集計したうえでの多数決の結果であった。ここには明確に、功利主義的価値基準が現れている。

「最大多数の最大幸福」のスローガンで知られる功利主義は、人が感じる快を幸福、苦を不幸と捉え、社会全体の快と苦を総計し、快が苦を上回る選択肢を正しい選択肢とみなして、その選択肢を選ぶべきと唱える規範倫理学である。言い換えると「功利主義とは、なによりも道徳的判断の基準を「幸福」に置くという、幸福至上主義の学説なのである」（一ノ瀬、2016: 125）。

人類は自分たちの快のために、異種の生物に多大な苦を与えてきた。人類が享受する快の総計は、数のうえで圧倒的多数者である異種の生物の苦の総計と比べた場合、かなり小さい。つまり、生物界全体において「最大多数の最大幸福」を実現するためには、人類の絶滅が倫理的・規範的に正しいと判断されるわけである。

以上、概観してきたように、滅亡論は倫理的・規範的な存在論であることがわかる。どのような存在者がどのように存在しているかを問うだけでなく、どの存在者が存在すべきか、善い存在の仕方とはどのようなあり方なのか、などの問いを滅亡論は問うからである。

こういった特徴を備えた滅亡論を考察対象にする理由は、滅亡論の第三の特徴として指摘した功利主義が、倫理学上の一学説であることを越えて、人々の行動や規範、価値判断の基準となっていると思われるからである。そして、この状況に問題を感じるからである。こうした認識や問題意識を、滅亡論の一つである反出生主義を取りあげて論じていく。議論の過程で、反出生主義の中核的思想家である D. ベネターの主張も検討する。次に、功利主義とは異なる立場から滅亡論を展開している議論を紹介し、功利主義的議論を相対化していく。また、功利主義が功利主義を自滅させるような逆説的帰結をもたらしつつあることも、滅亡論の考察からは明らかにできるとも考えている。こういった議論を経たのちに、滅亡論を考慮に入れた社会学の課題について検討していく。

では次のセクションで、結婚や出産の選択をおこなう人たちの言説をもとに、反出生主義がどのように人々のあいだで普及しているかについて、あるテレビ番組を通して紹介していきたい。

3 ママにはならないことにしました

2021年12月19日、NHKBS1（現在のNHKBS）にて「ママにはならないことにしました～韓国ソウル 出生率0.64の衝撃」というタイトルの番組が放送された。

番組は、韓国では子どもを作りたくない人が増えている、という一言から始まる。韓国での2020年の出生率（番組では明確に説明はないが、合計特殊出生率のことを指していると思われる）は0.84で、世界198か国中、最下位である（当時の日本の出生率は1.34）。なかでも首都ソウルの出生率が0.64であることが衝撃を与え、世代間の対立を深めていると番組はいう。

当該番組の制作に携わるディレクター、イ・スヨン（37歳 年齢は番組で表記されていたもの。以下同様）も、子どもを作りたくないと考えている女性の一人である。他方、カメラマンである夫（年齢不明だが妻とほぼ同じと思われる）は、旧世代の価値観の持ち主であるという。「僕は子どもがほしい。血筋を継ぐ人がいなくちゃいけない。僕は子どもが好きだし。もし君の考えが変わらないなら、別れたくないけど、真剣に考えないと」と夫は妻のスヨンに語る。こうして夫婦は、子どもを持たない選択をした女性たちへの取材を開始する。

番組は、韓国の女性が置かれている状況について、次のように紹介する。韓国では女性の前に敷かれている暗黙的な人生のルールがある。10代のころは名門大学に合格するため、ひたすら勉強。大学に入ったら、安定的な職場を目指して就職活動。就職したらキャリアを積むために働き続ける。生活が安定した後は、結婚相手を見つけないといけない。結婚しても終わりではない。最後は出産と育児。それを経てやっと本当の大人と認められるが、ルールから少しでも外れたら変人と思われる。

しかし状況は変わってきた。子どもを産んで育てることは、誰もが進むべき道なのか？ 子どもがいない夫婦はしあわせな家庭を築けないのか？ このように問いかけ、旧世代の価値観を拒否する世代が登場している。そのように番組は説明する。

たとえば、結婚しても意図的に子どもを持たずに共働きする夫婦、いわゆる DINK（Double Income No Kids）族がそれだ。17人の DINK 族を取材し『ママにはならないことにしました』という本にまとめた、フリーライターのチェ・ジウン（41歳）は、同じくフリーライターの夫ウィ・グンウ（40歳）と結婚して6年目。ジウンも子どもを作らないと決めた DINK 女性であるが、結婚前から子どもを作らないと決めていたわけではない。結婚後の今の生活に満足していて、子どもを作る必要を感じなくなったとジウンはいう。「子どもを産んで育てるには長い時間を費やさなければならない。ずっと面倒をみないといけない存在が日常に加わるということでしょう？ しあわせも感じられると想像はできるけど、今の生活を激変させる道を選ぶ必要があるの？」

そう語るジウンに、番組ディレクターのイ・スヨンは、自分も子どもを産むか産まないか悩んでいるが、そういうふうに悩むことが周りからは自己中心的だといわれる、社会に貢献すべきと

いう意味なんだろうけど……と話す。それに応えて「それは貢献ではなく犠牲だと思う。多くの女性が犠牲を払っているのに、なぜあなただけ犠牲を払わないのか？ という意味だ」とジウンは述べる。

裕福ではないが仕事を選ぶことができ、自分の時間を自由に使える今の生活にジウンはしあわせを感じている。だからこそ、出産と育児で日常を変えたくない。この思いの背景には、結婚後に仕事を辞め、家族のために生きてきた母親の姿があった。

1952年生まれの母親は、結婚後、ジウンと姉を育てながら、10年間、夫の父母の介護をした。実の子どもではなく、嫁である母親が介護を担わされる苦労を見て、結婚しても女性にだけ背負わされる義務に縛られたくないと、ジウンはいう。

性別による役割の違いの不当さに気づき、本人の意思は無視されたまま家庭のために犠牲を払われる従来の母親像に異を唱える今の世代。子どもの出産と育児を選ばないのは、犠牲を払われたくないからだ。そうナレーションは語る。

ジウンとは異なる理由で子どもを産まない選択をしている DINK 女性もいる。弁護士のチョン・ソヨン（38歳）は、個人で弁護士事務所を10年間経営してきた。彼女は妊娠・出産がキャリアを断絶させることを問題にする。「訴訟は1年から4年かかる長い仕事なので、誰が出産する弁護士に仕事を頼む？ 新規の依頼者がいなくなったら、収入にも響くし、そもそも私がこの業界からいなくなるかもしれない。弁護士になって10年目だが、そのあいだに出産で休職していた弁護士の一部が戻ってきたけど、明らかに以前より低いポストにいる。みんな、2、3ヵ国語はできるし、留学して何年も勉強してきたのに、新人並みの月給から再スタートしている。」

そう話すソヨンを支えるのが夫のイ・ドンジン（47歳）で、毎日妻を車で職場へ送り迎えしている。5年前まで大手企業に勤めていたが、夫婦二人とも多忙な毎日が続き体調を崩した。それがきっかけで夫は仕事を辞め、妻のサポート役にまわった。料理も夫が引き受けた。妻のソヨンは人権弁護士として活動しながら、小説家、翻訳家の顔も持つ。そんな妻のキャリアが出産で失われることを夫は望んでいない。

「妻はやりたいことが明確で、能力もあって、しかもそれが社会的な意味もある仕事だと思う。だから僕が仕事を辞めて手伝う方が、おたがいにっていいと思っている」とドンジンは語る。

4 人間は生まれること自体が不幸だ

番組はさらに DINK 女性の取材を続ける。次に登場するのが反出生主義の考えを持つ女性である。

イラストレーターで漫画家のウン・ボリ（40歳）にジウンが取材を試みたのは、ボリがウェブ漫画の作品で自分を「反出生主義に近い」と描いていたからだだった。

反出生主義について尋ねられたボリは、次のように説明する。「子どもに合意を得て産むこと

はできない。もし生まれなければ不幸も悲しみも苦痛も知らずに済むのに、生まれた以上は苦痛などを感じるしかない。だから、人間は生まれること自体が不幸だと考える主義です。」

ボリがそこまで考えるようになったのは、つらい経験があったからだという。彼女は以前ウェブデザイナーとして7年間、会社勤めをしていた。朝5時に起きて12時間以上働く毎日だった。しかし会社からは、それでももっとがんばれといわれ続けた。

生きていくにはずっとがんばらなければならない社会に自分は生まれてこなければよかった、と思うようになった。幸い、周囲の助けや趣味によって、つらい時期は乗り越えられたが、今は若者にとって、より生きづらい社会だと彼女は感じている。

「韓国は勉強に対するストレスがものすごく大きい。大学受験に失敗して自殺する人が毎年かからずいる。勉強のストレスが終わっても、今度は仕事による社会からのストレスが襲ってくる。一瞬たりとも休めず、ずっとがんばり続ける人生は苦痛でしかない。子どもが生まれたら、同じ思いをするはず。」

そう話すボリにジウンは「韓国で子どもを育てることについて、どう思う？」と尋ねる。

「今の韓国社会で子どもを育てている人は、ほんとうにすごいと思う。今はマイホームを持つこともできないし、物価は上がるばかりで、しかも仕事はない。だから SNS で子育て中の友だちの写真を見ると、「彼女の夫はいくら稼いでいるの？」と思ってしまう」とボリは答える。

こうして番組は、経済力へと話題が移る。ある学者は次のようにいう。子どもを産むからには、ちゃんと育てなければならぬ。そのためには経済力が必要。韓国では子どもを塾や習い事に通わせるのがあたりまえ。メディアの影響で完璧な親という理想像ができあがり、SNS がそれを追い求める気持ちをさらにエスカレートさせている。だからある程度のレベルに達していないと、子どもを産む資格がない、完璧な親でないと子ども育てる資格がないと思ってしまうのだ、と。

結婚するときには、男性側が新居を用意する風習が韓国にはあるが、不動産価格は高騰し、持ち家の夢とともに結婚からも遠ざかる人が増えている。非婚族の増加だ。非婚の考えに拍車をかけているのがネット社会の闇だと、番組は指摘する。

ソウルで非婚女性のコミュニティ団体（非婚女性団体エミフ）を運営するカン・ハンビョル共同代表（32歳）とハ・ヒョンジ共同代表（26歳）が、次の取材対象である。

この団体は有料の会員制だが、100名を超える人がメンバーとなっている。読書会、財テクを学ぶ会、英語の勉強会を開くなど、人生の伴侶を選ぶために時間を費やすより、自分を磨くことで社会のエリートになることを目指している。2020年、そんな彼女たちの生き方がネット上で攻撃的となった。

ハ・ヒョンジ「「非婚を選んだ女性たちの団体」として私たちを紹介する記事がネットに出た。早朝5時に公開され、数時間で検索件数1位になった。」

カン・ハンビョル「朝9時には悪意のある書き込みが6,000件もあった。」

じつはもともと女の子がほしかったカン・ハンビョルが、子どもをあきらめるようになったのは、このネット社会の怖さを感じたからだ。

「今の韓国社会は子どもがしあわせになれない社会だと思う。女の子は被害者に、男の子は加害者になりやすい。最近では小学生までもが先生を隠し撮りしたり、自分の3歳の妹の裸の写真をネットにアップしたり、寝ている母親の胸の写真を撮ってアップしたり、そんな社会になってしまった。加害者と被害者は明確だが、両方とも社会による被害者だと考えられる。だから、こんな社会に子どもを産み落とすのは、すごく自己中心的で無責任な行動だと思う」とカン・ハンビョルは話す。

違法な画像をアップするなどのデジタル性犯罪は、この3年で4倍以上に増加。家族までも盗撮の被害者・加害者になっている。こうした社会に恐怖を感じることで、女性は結婚や出産をますますためらうようになった。ディレクターのイ・スヨンはそう説明する。

5 二つの反出生主義

番組はまだ続くのだが、滅亡論の具体例である反出生主義が社会的現象となっていることを、いったんここで確認しておく。

イラストレーターで漫画家のウン・ボリが明確に反出生主義を唱えていることはいうまでもない。非婚女性団体の共同代表を務めるカン・ハンビョルも、反出生主義のことばを用いてはいないが、反出生主義の考えの持ち主と考えられる。というのも、彼女は以下の論点を主張しているからである。

①デジタル性犯罪が横行する今の韓国社会は、子どもがしあわせになれない社会だ。②男の子は加害者に、女の子は被害者になりやすいが、両者ともにこの社会の被害者だ。③こんな社会に子どもを産み落とすのは自己中心的で無責任だ。

カン・ハンビョルによるこれらの主張は、この世に生まれること自体が不幸だから子どもを持たないという反出生主義的主張と異ならないように、私には思われる。

では、ほかの、結婚はしたが子どもを持たない選択をしている人々については、どうだろう。たとえば、フリーライターのチェ・ジウンは、子どもを産み育てることは、現在の自分の人生を犠牲にすることになると主張していた。そう主張するのは、子どもを持つことが自分や夫婦にとっては害となりうるできごとだと捉えているからではないだろうか。

もちろん、ウン・ボリのように、生まれてくることは不幸だとか、出産は子どもに害を与えることに等しいなどとはチェ・ジウンはしていない。次世代を生み出すことは当の次世代自身に害を与えることだと主張しているのではなく、すでに生きて存在している自分や家族に対して出産や育児が及ぼす害のことを、チェ・ジウンは問題にしているのである。

反出生主義の厳密な定義があるのかどうか不明だが、出生に伴う害悪を理由に子どもを生み出

さない選択をすべきと考える立場を反出生主義とみなすなら、生まれてくることは生まれてきた本人にとって害悪だと主張することと、生まれてくることはその子を生み出した人たちにとって害悪だと主張することとの違いはほとんどないだろう。

つまり、チェ・ジウンやチョン・ソヨンのように、子どもを持つという選択をすることはその選択をした人たち自身に何らかの害悪（しあわせな夫婦関係を壊したり、積み上げたキャリアを無にしたりする効果）を及ぼすから子どもを持たない方が善いとする立場も、反出生主義的なのである。

そう考えると、番組「ママにはならないことにしました」には2種類の反出生主義者が登場していたことになる。1つは、子どもを生み出すことは、生み出された当の子ども自身に害悪を与えるので、子どもを産むべきではないとする立場である。まだ存在していない人に危害が加えられることを回避しようとするこの立場を「未在者危害回避型」の反出生主義と呼ぶことにする。ウン・ボリやカン・ハンビョルの主張がこのカテゴリーに入る。

もう1つはチェ・ジウンやチョン・ソヨンのように、子どもを生み出すことは、その子どもを生み出した家族など、すでに存在している人に害悪をもたらす可能性があり、その害悪を回避するために子どもを持たないことを選ぶ立場である。これは「既在者危害回避型」の反出生主義となろう³。

6 功利主義としての反出生主義

ここで確認しておきたいのは、「既在者危害回避型」にしろ「未在者危害回避型」にしろ、反出生主義が功利主義に分類されることである。子どもの出生が発生させる害悪（不幸）と快（幸福）を総計しうるとの前提で、不幸の量が幸福の量を上回ると推測し、子どもを産まない選択こそ道徳的に正しい（善である）と考えるのが反出生主義だからである。

また害悪を回避しようとする点でも反出生主義は功利主義的である。ベンサム議論を受け継いで功利主義をさらに展開させたジョン・スチュアート・ミルは、周知のとおり、「他者危害原則」を唱えた。「他者の行動に干渉できるのは、他者が自分に暴力を加えようとしているときに自分がそれを阻止しようとして相手にフィジカルな手出しをするというような場合、つまり正当防衛の場合だけであって、それ以外の場合は他人に害を与えないのだから本人の自由に任せてほうっておくべきだ、という考え方」（一ノ瀬、同：149）である。

既在者危害回避型の場合、子どもを持つかどうかの選択に悩んでいる大人は、生まれてくる子どもが、自分たちに害を与える可能性が高いと判断し、子どもを持たないことでその害悪から自分たちを防衛しようとしている。

未在者危害回避型の場合は、親になりうる大人が、未だ存在していない子どもになり代わって、その子どもの立場に仮想的に身を置く。親になりうる「現実の私」が、未在者である子ども

の「仮想上の私」になるわけである。そのうえで「仮想上の私」は出生後に、社会や他者から害悪を加えられるだろうと想定する。「現実の私」が感じたように「生まれてこない方が良かった」と「仮想上の私」は感じるだろうと想定するわけである。そしてその害悪を「仮想上の私」が被ることを防ぐため、「現実の私」は「仮想上の私」すなわち自分の子を産まない選択をする。

このように考えられるなら、既在者危害回避型であれ未在者危害回避型であれ、正当防衛として反出生主義を主張しているといえよう。子どもを持たない選択は、正当な防衛というわけでもある。

7 では出生主義は？

反出生主義が功利主義なら、出生主義はどのようなだろう。

出生をめぐる歴史を詳しく論じる余裕はないが、そもそも結婚や出産が選択できるとは考えられなかった時代や社会はあるだろう。

前述のとおり、番組「ママにはならないことにしました」は、韓国では女性の前に暗黙の「人生のルール」が敷かれていると語っていた。10代は名門大学合格のために勉強。大学入学後は安定した職場を目指して就職活動。就職後はキャリアを積むため働く。生活が安定したら結婚相手を見つける。結婚後は出産と育児。それを経て本当の大人と認められ、そのルールから少しでも外れたら変人と思われる。この「人生のルール」は日本でも機能してきたし、現在でも機能していないわけではない。

「人生のルール」が多くの人々に信じられていた時代では、結婚や出産は個々人が選択すべきことがらだとみなす人はほとんどいなかっただろう。その時代、人々は、結婚せず子どもも持たない選択肢があるなどと思ってもみなかっただろう。

「人生のルール」というメタファーは、すでに敷設されている軌道上を、決められた駅に停車しながら順に進んでいけば、最終目的地に確実に到着すること、人生も同じようなプロセスであること、を意味している。この「ルール」上に結婚という駅や出産という駅があり、それらの駅を停車・通過しないと最終目的地に到着できないのだから、駅に停車するかしないかの選択など考えられないわけである。

番組「ママにはならないことにしました」は続けてこう語っていた。「しかし状況は変わってきた。子どもを産んで育てることは、誰もが進むべき道なのか？ 子どもがいない夫婦はしあわせな家庭を築けないのか？ このように問いかけ、旧世代の価値観を拒否する世代が登場している」と。

ただし「旧世代の価値観」を拒否することが可能になったのは、それ以前に結婚や出産をしない選択がありえたからである。その選択を可能にしたのは国家である。国家は特定の人々に結婚や出産をさせない選択をおこなってきた。たとえば、優生学的な産児制限をおこなうナチス・ド

イツのような社会が登場し、障害者などが結婚したり妊娠・出産しないよう政府が選択（強制）した。そういった差別的な強制でなくとも、無計画に子どもを作って貧困に陥ったり中絶したりすることのないよう「家族計画」を政府が推奨する時代もあった。政府によって選択を迫られた国民は、出生に関する選択の主体となった。服従による主体化の典型例である。二人は作るが三人以上は持たないように「家族計画」して避妊するなど、一定数以上は子どもを持たない選択を国民自身が自覚的にこなうようになった。

医療テクノロジーが発展すると、たとえば、不妊治療によって、出産をあきらめていた人に出産のチャンスがもたらされ、治療を受けるかどうかを選択できることになった。遺伝子検査の開発によって、出生前診断を受けるかどうかを選択すること、診断の結果によって中絶するかどうかを選択することが求められるようになった。

このような状況が浸透することで、「子どもを産んで育てることは、誰もが進むべき道なのか？ 子どもがいない夫婦はしあわせな家庭を築けないのか？ このように問いかけ、旧世代の価値観を拒否する世代が登場」することも可能になったと思われる。

そして、現在、結婚や出産を個々人の自由な選択の問題として捉えることがあたりまえとなり、韓国社会も日本社会も少子化を、社会問題の最優先事項として位置づけるようになった。そのような位置づけをおこなう立場の一つが出生主義である。

出生主義の特徴を、逆巻（2019）は以下のようにまとめている。「グローバル経済競争において、労働人口の増加は、国力と国益、とりわけ税収に直結する。だから国民と国家経済を安定的に再生産すべく、子どもをつくらない家庭に課税したり、出産奨励金を設定したり、疑似科学によって「適齢期」出産を奨励したり、少子化進行による国家経済破綻の危機をあおったりすることによって、各国政府は出生率の向上を促す。しかしながら、移民や難民による人口増加は歓迎されない。福祉予算の削減や対テロリズム政策を背景に、移民や難民は秩序紊乱の潜在的リスクとして忌避される。市場における労働の生産と家庭における生殖、そして国家制度の再生産を促進する一方、招かれざる食客は排除するのが出生主義（natalism）の常道である」（逆巻、2019: 212）。

逆巻の主張に従えば、労働人口を増やすことを国益や国力と直結させて考える出生主義も、功利主義に分類できる。出生主義を主張する人は、国益・国力を増す理由として「最大多数の最大幸福」をあげるだろうと想像されるからである。移民・難民の排除も同じ理由に行き着くだろう。

反出生主義と出生主義は、出生に関する解釈をめぐる争うものの、功利主義的であることでは共通しているのである。

以上のことを確認して、以下再び滅亡論としての反出生主義について検討する。特に、反出生主義の思想的中心人物と思われる哲学者 D. ベネターの主張について、その特徴を浮き彫りにする作業をおこなう。ただし、滅亡論の一つのヴァージョンとしてベネターの思想を位置づけ、そ

の特徴を抽出する作業をおこなうのが目的なので、彼の思想全体を総合的に検討するわけではないことを断っておく。

8 ベネターの反出生主義的滅亡論

まず取り上げるべきは、ベネターが人類の滅亡を肯定している点であろう。しかも、「すべての条件が同じであれば絶滅は先延ばしにするよりは早ければ早いほど良い」(Benatar, 2006: 194 = 2024: 197) とも述べる⁴。では意図的に人類を滅亡させるべきなのかというと、彼はそうは主張しない。

ベネターは、滅亡が起きる仕方として「殺しによる絶滅」と、「死んでいくことによる絶滅」または「子作りしないことによる絶滅」の二つがあるという。

「殺しによる絶滅」として、人類が人類自身を皆殺しにする場合や自然が人類を皆殺しにする場合（小惑星が地球に衝突する場合など）、および、これら二つが重なる場合が想定される。

後者の「死んでいくことによる絶滅」と「子作りしないことによる絶滅」は、説明するまでもないが、ベネターの反出生主義が目指すところのものである。

それゆえ前者よりも後者の方が望ましいとベネターは考える。「殺しによる絶滅」は、人類の滅亡を早く実現するものの、道徳的に問題があるという理由からだ。死は誰にとっても起きてほしくない害悪だが、殺されるのは、殺される当人にとって、より害悪の多い死の迎え方だと誰もが考えるだろう (Benatar, *ibid.* 195-196 = 199-200)。だから、反出生主義のやり方で滅亡する方が望ましいことになる。

しかし、反出生主義的滅亡方法にも問題はある。徐々に人口が減少していき、もうあと数世代で滅亡するとしよう。「もうあと数世代で滅亡する」予定の、その数世代に加えられる害悪が問題なのである。人類滅亡が確定していることを知っているその世代は、未来に希望を持つことができなくなり、社会は混乱し秩序は乱れ、インフラ設備も補修されず、以前の世代にはなかった様々な害悪に苦しむことになる。そういう問題が発生するのである。とはいえ、その害悪に苦しむのは現在のように何十億の人々ではなく、かなり数が少なくなっているはずだ。だから「全体からみると (all things considered) より悪いということにはならない」(Benatar, *ibid.* 198 = 202 傍点引用者) ので、ベネターは反出生主義的滅亡方法を正当化する。

9 宇宙の視点

上の引用文に「全体から見ると」という表現があるが、この「全体から見ると」と自称するベネターの視点を第二の特徴として紹介したい。

ベネターは、人生がいかに悪いものであるかという主張を説得的に論じるため、人生の質に関

する三つの見解を検討する。検討の結果、いずれの見解によっても人生はとても悪いものという結論になるという。

三つの見解のうち第三のものとして紹介される「客観的リスト説 (objective list theories)」を検討する際に、「宇宙の視点」という自らの視点にベネターは言及する。ちなみに客観的リスト説とは、人生における良いものと悪いものをそれぞれリストアップし、それを比較考量することで人生の質を判断しようとする立場である。

ベネターからすれば、客観的リスト説は、客観的といいながら真に客観的な視点に立てていない。あくまで「人間の相のもと (sub specie humanitatis)」で、つまり人間の視点で、良いもの・悪いものをリストアップしているにすぎない。客観的リスト説を唱える人は、リストアップされた項目がほとんどすべての人に妥当するだろうという理由で、そのリストの客観性を主張する。だがそれは「永遠の相のもと (sub specie aeternitatis)」で、どんな人生が良い人生なのかを判断しているわけではない。そうベネターは批判する。

たとえば、40歳で死ぬのは悲劇だと思う人は多いだろうが、90歳で死ぬのを悲劇と思う人は少ないだろう。客観的リスト説なら、90歳で死ぬのは良い人生としてリストアップすることだろう。しかし、そのように判断するのは、90歳まで生きる人はそう多くはなく、長生きできたのだから良いことだ、と考える慣習があるからだ。つまり、客観的リスト説を唱える人は、自分たちが生きる環境に制約されて良い・悪いを判断している。すなわち「人間の相のもと」で判断しているのである。

そのように客観的リスト説を批判するのだから、ベネターは人間的視点を超越した視点で良い・悪いを判断しているとの前提にたっているはずである。もちろん本人もそのつもりでいる。彼は「永遠の相のもと」でものごとを判断していると自称する。その視点を「宇宙の視点 (the perspective of the universe)」や「人類全体をみている視点 (the perspective of humanity)」 「真に客観的な視点 (a truly objective perspective)」とも言い換える (Benator, *ibid.* 81-83=88-89)。

この宇宙的視点にたてば、人生には意味がないということがわかるとベネターはいう。「宇宙的視点からは、慈善家であれ草の葉を数える人であれ、どちらの人生も意味がないのである。……従って宇宙的視点からみて意味はないのだから、私たちの人生は少なくともそれほど良いものではないと思うべきなのだ」 (*ibid.* 83=89-90)。

そんな宇宙的視点に、そもそも人はたつことはできないのではないか。そういう疑問や反論に対しては、「想像力の欠如 (a failure of imagination)」 (*ibid.* 84=90) という理由でそれらの疑問・反論をベネターは退ける。

10 ベネターの功利主義と害悪概念

第三の特徴として、ベネターの功利主義について紹介しておこう。

反出生主義が功利主義的であることは、すでに何度も指摘してきた。ベネターの思想もやはり功利主義である。人生における快樂の量と苦痛の量を比較考量して、苦痛の方が量が多いので、生まれてくることは害悪だと主張するからである。いくつか引用しておく。

「私はこれまで、どんな人生も続ける価値がないほど悪い (bad) ということを書いてきたのではないし、述べる必要もなかった。そうではなく、何であれ悪いと思われるものが相当な量、どんな人生にも含まれている、ということを書いたのだ。……悪いことの量が比較的少ないとしても、人生にあるかもしれない限られた量の良いことがその悪いことを上回ることはあり得ないのだ」(ibid. 88=94)。

「たとえ道徳的主体や合理性や多様性といったような要因が世界を更に良くするのだと考えているとしても、それらに人々の人生に付随する莫大な量の苦痛 (suffering) を上回る価値があるとはとてもではないが思えない」(ibid. 199-200=203)。

「人類絶滅は害悪 (suffering) の総量を大いに減少させるだろうが、人類は自分から絶滅はしないだろう」(ibid. 224=227)。

ちなみにベネターの著書の副題「存在してしまうことの害悪」の「害悪」は harm の訳語である。また、pain には「苦痛」の語が当てられている。

ところで、ベネターがいう「悪いこと (bad)」「害悪 (harm, suffering)」「苦痛 (suffering, pain)」(以下「害悪」で統一する)とは、具体的にどのような状態を指すのかについて、ここまで明確にしてこなかった。

あたりまえのことだが、どういう状態が「快樂」(幸福)で、どういう状態が「害悪」(不幸)なのかをはっきりしないと、「人生は悪いことの量の方が多い」から「生まれてこない方が良い」というベネターの主張の真偽は判断できない。

では、どのような状態を「害悪」とベネターはみなすのか。

じつはベネターは、この問いへの答えを要領よくまとめてくれているわけではない。本文の記述のなかで散発的に触れるだけなのである。以下、本文中で「害悪」の例としてあげられていると思われるものを列挙する。

飢餓、身体的障碍、体調不良、生まれつきの虚弱体質、死 (ibid. 29=37)。

不快、痛み、悩み、罪悪感、恥、いらだち、退屈、不安、挫折、ストレス、恐怖、悲嘆、悲しみ、孤独、空腹、のどの渇き、腸と膀胱の膨張、疲労、温度の高低による不快感、アレルギー、頭痛、生理痛、閉経期に生ずる体のほてり、吐き気、低血糖、発作、憂うつ、身体が思うように動かないこと、エイズやガンなど命を脅かす病気による痛ましい被害、死別 (ibid. 70-72=76-78)。

洪水や津波などの自然災害、飢餓死、伝染病やガンなどの病気、事故死、幼児死亡率の高さ、大虐殺や戦争、強姦、暴行、不具にされること、殺人、奴隷化、不正な投獄、村八分、密告、辱め、脅迫、自殺 (*ibid.* 89-92=95-97)。

私の見落としているものもありそうだが、以上の状態にあることが「害悪」であるようだ。

他方の「快樂」や「良さ」(以下「快樂」に統一)とはどういう状態なのか。この問いに対する答えもベネターは、はっきりさせていない。しかも「快樂」の例示はさらに少ない。それは当然といえば当然かもしれない。人生は「害悪」ばかりだから生まれてこない方が良いと主張するのだから。

しかも、人々が「快樂」とみなすものも実際には「快樂」なのではなく、人々は現実を歪めて経験しているのだとベネターはいう。なぜそういえるのか。一つには、前述のとおり、「宇宙の視点」ではなく「人間の視点」でしか人々は判断しないから。もう一つは「ポリアンナ原理」によって、「害悪」も「快樂」として認識してしまうからだ、とベネターは説明する。

こうして功利主義者ベネターは、人生は「快樂」の総量より「害悪」の総量の方が圧倒的に多いので、人は生まれてこない方が良い、子どもを産まない選択が正しい、という倫理的結論に至るのである。

11 「宇宙の視点」の俗っぽさ

以上、ベネターの反出生主義について、滅亡論と関わりが深いと思われる特徴を紹介してきた。以下ではしばらく、これらの特徴について批判的に検討していく。

ベネターの反出生主義の特徴は、独断的で絶対主義的な全体主義としてまとめられるように私は考える。

彼は「宇宙の視点」から「人類全体」を見ているという。これを空間的表現とするなら、それを時間軸に移行させて「永遠の相のもと」で判断しているともいう。そしてこのような視点こそ「真に客観的」とベネターは述べていた。

他方、「人間の視点」は相対的で、限定的ということになる。自分の主張を批判する人々はこの歪んだ「人間の視点」でしか判断できない人々だ、ともベネターは考えているようである。

空間的にも時間的にも真に客観的な視点から判断するベネターは、無謬の絶対的存在者であるかのようである。ただし、その視点を得るのは難しいことではなく、想像力を働かせれば誰でもその絶対の領域に到達できるともベネターは述べているが。

「宇宙の視点」から「永遠の相のもと」で判断していると自称することほど人間臭いことはないように私には思える。そしてこの誇大妄想的な思想は、実存主義者 J-P. サルトル (1956 (1954)) が批判した「反ユダヤ主義」に似ている。

サルトルは次のように述べている。「反ユダヤ主義は、自己の自由な、そして総括的な選択の

結果であり、単に、ユダヤ人に対してだけでなく、人類全体に対して、歴史と社会に対して、その人のとる一つの総合的な態度である。それは、同時に情熱でも、世界観でもある」(サルトル、1956 (1954) : 14)。

ベネターの反出生主義は、子を持つとする人に対してだけでなく、「人類全体に対して、歴史と社会に対して、その人のとる一つの総合的な態度」であり「世界観」あるいは宇宙観だと私には思える。

反ユダヤ主義についてサルトルは様々な特徴を抽出しているのだが、次の特徴はベネターの反出生主義にも見られる特徴ではないだろうか。

「問題にされるのは利害の衝突ではなく、悪い勢力が、社会に与える害である。そうなれば、善とは、なによりも先ず悪を破壊することとなる。反ユダヤ主義者の暗さの陰には、ひとたび悪が取り除かれれば、おのずから調和がもたらされるという楽観的な信仰がかくれている。従って、彼等のつとめは、ただただ否定的である。一つの新しい社会を作り上げるということは問題にならない。現在の社会をきよめるというだけである」(サルトル、同：47 傍点引用者)。

注意すべきは、反ユダヤ主義者にとっての「害」とはユダヤ人の存在なのだが、ベネターの反出生主義にとっての「害」は「害を感じる人間」の存在だという点である。その点が、番組「ママにはならないことにしました」に登場していたウン・ボリヤカン・ハンビョルらの反出生主義とは異なっている。

ウン・ボリたちにとっては、労働を搾取したり性的犯罪の被害者を作り出したりする社会こそ「害」である。その「害」が取り除かれるなら、子を持ってもかまわない。彼女たちにとって「害」の存在は絶対的な所与ではなく、人間が解決することができる相対的な所与なのである。いわば条件付きの反出生主義といえよう⁶。

それに対して、「宇宙の視点」から「永遠の相のもと」で判断するベネターの反出生主義は、宇宙から「苦痛」などの「害」を消滅させて、宇宙を「きよめる」ことを目指す。その目標を達成するには「害」を感じる人類（および感覚を持つあらゆる生物）を生み出さなければよい。「社会的状況の改善や変革などによって「害」をなくすることができるなどということはあるえない。なぜなら「害」を感じるができる存在者が存在しているからだ」とでも考えているようだ。ベネターにとって「害」の存在は絶対的な所与なのである。だから、その所与を所与でなくするには、「害」を感じる可能性を持つ存在者を存在させないのが「善い」こととなる。その意味で、ベネターの思想は絶対的で全体主義的な反出生主義といえよう⁷。

それにしても「宇宙の視点」から「永遠の相のもと」で判断するなら、「宇宙的視点からみて意味はないのだから、私たちの人生は少なくともそれほど良いものではないと思うべきなのだ」と主張するのではなく、「人生は良く（善く）も悪くもない、善悪などというものは人類が勝手に設定したものだ」といった「善悪無記」を主張すべきなのではないか、と私は素朴に感じる。

退屈を「害悪」とカテゴライズするなどは、これほど俗っぽい視点から判断するのも珍しいと

思うほどである。いったいどこが「宇宙の視点」「永遠の相のもと」での判断なのだろう。

「宇宙の視点」や「永遠の相のもと」でものごとを考える人には、少なくとも哲学者一ノ瀬正樹がいう「ためらい」の態度が似つかわしいように思う。

「子どもの虐待や、人種差別などについて、私たちの現在の人生視線においては、人権概念に訴えて解決を図ることに迷うところはまったくないだろう。そして同時に、宇宙視線に立ち、もっと悠久の時間を考慮したり、倫理的な正しさの根拠について沈潜して思考したりするとき、果たして私たちに互いを評価したり裁いたりする真の権限があるのだろうか、という問いが立ち上がることに思いを致さなければならない。こうした問いに面し、誠実であろうとする限り「ためらい」を抱かざるをえないという私たちのありよう、そうしたゆらぎゆくありようを安んじて受け入れると「決断」すること。……私には、こうした「ためらい」と「決断」の積み重なるゆらぎの連続にこそ、謙虚さを伴った倫理的な崇高さ、あるいは高潔さが生い育つように思われる」(一ノ瀬、2024: 218 傍点引用者)。

一ノ瀬のいう「人生視線」や「宇宙視線」は、それぞれベネターの「人間の視点」や「宇宙の視点」に相当する。人類が「これが正しい」とか「これが善だ」などと主張しても、「宇宙の視点」なり「宇宙視線」からすれば、そのような主張が「絶対」とはいえないのではないかと「ためらい」、そのようにためらわざるをえない現実を受け入れる「決断」をする。「人生視線」による判断と「宇宙視線」による判断はジレンマに陥り、どちらかの正しさを決めることができない。だからといって、どちらかを排除するのではなく、未決の状態に耐え、両者を同時に抱え続ける「両立思考」(一ノ瀬、同: 21)こそ、「宇宙の視点」で判断する者には必要なのではないか。

しかし、ベネターには、ためらいの態度など見られない。ためらうどころか、清々しいほどきっぱりと人生の害悪をいい、人類滅亡の善さを説く。「想像力の欠如」とは、ベネターにこそ突きつけられてしかるべきなのではないだろうか。

12 シェフラーの滅亡論

さて、滅亡論の一つのヴァージョンとしての、ベネターの反出生主義に関する検討は以上までとするが、ここまでの紹介を通じて、滅亡論が功利主義を前提にして展開されてきていることが浮き彫りになってきただろう。

人類滅亡について、①人類が異種に及ぼしてきた害悪の大きさとの関連で考えたり(八塚の「みんなの願い」の場合)、②人類が生まれてくること自体の害悪の大きさとの関連で考えたり(反出生主義の場合)と、幸不幸の量的比較によって善悪を判断すること、つまり功利主義的に考察することが、滅亡論ではあたりまえのようにおこなわれている。

このような比較考量は、人類の存続あるいは滅亡がもたらす帰結をどのように評価するかに関

する考察でもあるので、帰結主義的でもある（功利主義は一般に帰結主義的なので、当然といえば当然だが）。

では人類滅亡は功利主義的・帰結主義的に考えるしかないのかというと、そうではない立場もある。

たとえば、哲学者 S. シェフラー（2013=2023）は、思考実験を通して非帰結主義的に滅亡論を展開する。彼は二つのシナリオを想定して思考実験する。一つは「ドゥームズデイ・シナリオ」である。「あなた自身は通常の長さの寿命を持つことになるが、あなたの死の三十日後、地球は巨大小惑星との衝突によって完全に消滅する、ということをあなたが知っている想定する。この知識はあなたの残された生涯の中であなたの態度にどのような影響を与えるだろうか？」（Scheffler, 2013: 18=2023: 44-45）。

もう一つは「不妊シナリオ」と呼ばれる。こちらは P. D. ジェイムズ（1999（1992））の小説『人類の子供たち』をもとにしたシナリオである。1990 年代後半、人類は突如不妊化し始め、物語の時代設定である 2021 年までの 25 年間、子どもが一人も生まれてこなかったし、今後も生まれてこないと予測されている。そういう設定の小説に準拠したシナリオである。

これら二つのシナリオが滅亡論であることはいうまでもない。こうしたシナリオを想定したときに、すでにこの世に存在するわれわれの態度や生き方はどのように変化するだろうか。それをシェフラーは思考実験していく。そうして、われわれは自分の個人的死の想定以上に人類滅亡の想定の方から大きな衝撃を受けるだろう、という仮説をシェフラーは論証していく。「差し迫った人類消滅の見込みは、価値ある生——評価される活動への心からの関与によって組織される生——を今ここで送るわれわれの能力を広範に脅かす。……私が論じたように、人類の生存——永遠ではないにしても、少なくとも不定の長期間の生存——へのわれわれの確信は、われわれがわれわれの活動の多くの価値を個人として確信するための語られざる前提条件である」（Scheffler, *ibid.* 107-109=171-173）。

もちろんわれわれは自分の死を恐れる。自分にとって大切な人の死も恐れる。自分の死後の、あの世における生（個人的後世）を信じたい気持ちもある。けれども、それら以上に、自分が顔も名前も知らない人たちが自分の死後にも生き残ること（集合的後世）の方が重要なのではないか、重要だからこそ、われわれは自分の死後にも自分の知らない人々が存続すること（集合的後世）を自明視しているのではないかとシェフラーは主張する。

以上の紹介からもわかるように、差し迫った人類滅亡に関する知識がすでに存在しているわれわれに与える影響について思考実験するところに、シェフラーの特徴がある。もう一つここで確認しておきたいのは、シェフラーが人類滅亡を思考実験するなかで、功利主義や帰結主義を退けている点である。

二つのシナリオのうち、「ドゥームズデイ・シナリオ」に接したとき、人々は功利主義的・帰結主義的な態度でこのシナリオに対処しないのではないかとシェフラーは問う。「私の思うに、

われわれのほとんど誰ひとりとして、地球の破壊が全体として善いことか悪いことかを判断するためにそれがもたらす善い帰結と悪い帰結について熟慮することはないだろう。……むろん地球の破壊が多く恐ろしい帰結をもたらすということは本当だ。たとえばそれは人間のあらゆる喜びと創造と愛情と友情と美徳と幸福を終わらせてしまう。……だがその一方、それは人間のあらゆる苦しみと残虐行為と不正も終わらせることになる。……しかし私の思うに、このシナリオへの反応として差し引き計算をして、差し迫った地球の破壊は全体として歓迎すべきものか否かを判断しようとする人はほとんどいないだろう。少なくとも一見したところ、われわれがそのように反応しないという事実は、われわれが評価するもの、あるいはわれわれにとって重要なものに関する態度の中には非帰結主義的次元があるということを示唆する。われわれが評価するもの、あるいはわれわれにとって重要なものは、最善の帰結——それが何であれ——が単に生ずるということだけではないのである」(Scheffler, *ibid.* 20-21 = 47-48 強調原著者)。

「このシナリオ（ドゥームズデイ・シナリオ）への反応として差し引き計算をして、差し迫った地球の破壊は全体として歓迎すべきものか否かを判断しようとする人はほとんどいないだろう」とシェフラーは推測するが、ベネターはその「ほとんどいない」人の一人となるだろう。そしてベネターは地球の破壊を「歓迎すべきもの」として捉えるだろう。

シェフラーは、功利主義的・帰結主義的立場から人類滅亡について考察することに意義を見出さない。その理由は、人類は滅亡した方が善いとか滅亡すべきだといった、規範的な議論をシェフラーがしたいわけではないからなのだろう。

では人類滅亡について規範的に検討する場合には、功利主義的・帰結主義的に考察せざるをえないのだろうか。

13 メイの滅亡論

哲学者 T. メイ (2024) は、「人類は滅亡すべきか」「もし存続すべきだとしたら、どういう理由で人類の存続を正当化できるのか」という問いを立てる。メイは、功利主義を重視しつつも、功利主義は「人類は滅亡すべきか」という問いに取り組むための包括的な枠組み (overarching framework) にはならないと述べ、特に多元主義 (pluralism) の視点が必要だという (May, 2024: 19)。たとえば功利主義だけでなく、義務論の立場にもとづき、権利や尊厳、理性などの点から人類存続を正当化できる可能性を探ろうとする。また彼は、自分が人の視点 (human viewpoint) から上記の問いに答えようとしていると明確に述べてもいる。

まずメイの功利主義的考察を紹介しておく。その考察は、人類がこの世界に付け加えた善さや幸福と害悪との比較考量からなる。

メイによれば、人類が滅亡したら世界から失われるものがある。人類はたとえば科学的活動によって世界に関する正確な知識、すなわち真理を得る。あるいは、世界の美を経験したり、その

経験を芸術作品として表現したりする。人類はまた、法や規範を創造し、それに則って「善い」生活を実現しようとする。このように人類は真・美・善を経験する。これは異種の生物には経験できないことだろう。そうだとすれば、真・美・善に関する経験という善さを人類はこの世界に付加していることになる。

しかし他方で人類が異種の生物に与えている害悪について、たとえば食肉用に生み出され、劣悪な環境で育てられ屠られる動物たちの数を考えただけでも大規模なのに、人間の活動が原因の気候変動や環境破壊が異種の生物に与える害悪をも考慮に入れると、その害悪の大きさは「天文学的 (astronomical)」(May, *ibid.* 98) だとメイはいう。もし人類が子どもを作り続けるなら、異種に与える害悪の量は、人類存続が生み出す善さの量をはるかに上回る可能性が高い。やはり人類は滅亡すべきなのか。

滅亡すべきという解答にも滅亡すべきでないという解答にもメイは与しない。代わりに、いくつかの問いかけをおこなう。たとえば「あなたは異種の動物を残酷に扱うような人になりたいか」と問いかける。この問いへの解答は「あなたはどんな人でありたいと思っているか」(May, *ibid.* 125) に関わる。つまり、「それぞれの生き方 (the way each of us lives our life)」を、滅亡論を通して、それぞれが考えることの重要性をメイは指摘する。

それは、異種の生物や自然的世界などに対するわれわれの態度を問題にすることでもある。人類も自然の一部だと、かなり昔からいろんな人が主張してきたにもかかわらず、人類は一方的に異種の生物や自然環境を自己中心的に利用してきた。このような歴史を念頭に置きながら「自分たちが及ぼす害悪全般を知る人類の能力には限界があると思うが、自己欺瞞 (self-deception) の能力はほぼ無限のように思える」(*ibid.* 1412)。「もし道徳的に敏感な仕方で見出せないなら、人類がいない方が世界はましになるだろう」(*ibid.* 146)。このように述べて、人類が態度を改める必要性を主張する。

さらにメイは実存的な問いかけをもおこなう。われわれ人類がこれからも存続していくことが正当化されるかどうかを問うより、異種に害悪を与えない生き方を試してみるつもりがわれわれにはあるかどうかを問うべきなのだ、と。「外部から自分自身を見つめ、どうするかをあれこれ悩むのではなく、われわれ自身の内部から見つめ、どうするつもりなのかを問うべきなのだ。……人類の存続が善いことなのかどうか今のところわからないし、この先もわかることは不可能だろうが、人類の存続をよりよくするために何ができるのかはわかっている。それをするかどうかは……我々自身のコミットメント次第である」(*ibid.* 148)。

これは実存主義者が問いかけそうな問いではないだろうか。というのも、メイがいう「コミットメント」は、サルトルがいう「アンガジュマン」に置き換え可能のように読めるからだ。

14 功利主義の逆説

ここまでいくつかの滅亡論について紹介・検討してきた。浮き彫りになってきたのは、多くの

滅亡論が功利主義的思想に基づく規範倫理学に分類されることである。

まず、滅亡論の多くは、人類が生み出してきた快（幸福）の量と苦（不幸）の量を比較考量する。ただし、誰に苦を与えるかについては、いくつかのタイプがあった。既在者危害回避型の反出生主義の場合、すでにこの世に生を享けている大人（子を持つことを期待されている大人）が、受苦者として位置づけられていた。ウン・ボリやベネターのような未在者危害回避型の反出生主義の場合は、これから生まれてくるだろう人が受苦者である。メイは、八塚と同じく、異種の生物や自然的世界を主な受苦者とみなしているようである。その意味では、異種危害回避型の滅亡論ということになるだろう。

いずれにしろ、こうした受苦者が受ける苦の圧倒的大きさを理由に、人類は滅亡すべきという規範的な結論を導き出す。

他方でシェフラーは、予測される滅亡に直面したわれわれが、功利主義的・帰結主義的な考え方を採用する可能性は低いと見積もっていた。そのように彼が推測するのは、規範倫理学的関心を持っていないからかもしれない。「～すべき」という結論を得ることではなく、われわれが自明視している前提を思考実験を通して意識化することを、シェフラーは目指しているようだからだ。メイも、功利主義的議論を展開するものの、功利主義以外の観点の重要性を指摘していた。

以下、私なりに社会学的な問いを問いかけてみたい。まず、滅亡論が問題にする「人類の害悪」は、滅亡論が自明視している功利主義の産物なのではないか、という問いである。

功利主義は、社会全体の幸福の量を最大化し、不幸の量を最小化すべきと考える規範倫理学であった。それゆえ「功利主義は、個人の利己的な欲求の充足を追求することをよしとする利己主義的な考え方とはまったく異なるし、それどころか功利主義は、個人の利己的な欲求を多くの場合、抑制することを命じる」（一ノ瀬、同：124-125）。

たとえば、電車の車内で若者が座り老人が立っているときの全体の幸福の量と、若者が立ち老人が座っているときの全体の幸福量とを比較すると、老人が立っているときの方が疲労という苦痛の総量が大きくなると考えられるので、若者が座りたい欲求を抑制して席を譲り老人が席に座るのが、功利主義的には道徳的に善いことであり、なすべきこと、とされる。

では、こういう場合はどうだろう。どうしても電車で座りたい老人が、ある若者にお金を支払って、その老人が乗る予定の電車で先に座ってもらい、老人がその電車に乗ったときその若者が立って、若者が座って確保していた席に老人が座る場合である。老人の疲労という苦痛はなくなり、お金をもらった若者の幸福は増え、全体として幸福の総量は増えるわけである。もしこの老人だけでなく、席に座って苦痛を減らしたい老人全員が、お金を払って、この電車内席取り代行サービスを利用すれば、幸福の総量はさらに大きくなるだろう。功利主義からすれば、これはさらに道徳的に善いこととなる。

もちろんこの話は単純化が過ぎ、たとえば老人が席取り代行に払うお金をどのように捻出するのかによっては（たとえば他人から盗んだお金であったり、家賃や光熱費の支払いに使う予定の

お金だったりした場合）幸福の総量が大きくなるとはかぎらないのだが、じっさいにこのような代行サービスは現実化してきている。ある商品がほしいが行列に並ぶ時間が惜しいし、行列に並ぶ苦痛も避けたい。そこで自分の代わりに行列に並んでその商品を購入してくれる人を雇い、商品代金と手間賃を払う。代理を頼んだ人の苦痛は減りほしい商品も手に入って幸福量も増す。代理で行列に並んだ人も、どうせ暇だった時間がお金に変換されて幸福量が増す。こうして依頼人と代理人全体の幸福量は大きくなる。

お金を支払う人（たとえば代行を依頼する人）とそのお金と等価な何かを提供する人（たとえば代行する人）とのあいだに存在するのが「市場」だとしたら、社会が市場化していくことは功利主義的には道徳的に善いこととなるだろう⁸。

お金を払うから母親の胸の写真を撮影して送るよう SNS で子どもに依頼し、子どもは依頼されたことを実行してお金をもらう。依頼者と子どもとの関係は、俗にいう「Win-Win」の関係となるだろう。依頼者と子どもの双方とも、自分の欲望を叶えることができ幸福の総量は増える⁹。この犯罪行為も功利主義的には道徳的に善いことになりかねない。

そして、これから生まれてくる子どもは、このような犯罪行為をそそのかす社会の被害者になるという害悪を享ける可能性が高いと推測して、子どもを持たないことにしたカン・ハンビョルのような反出生主義者からすれば、この害悪は功利主義的価値観を自明視する社会が生んだ害悪なのではないか。つまり功利主義が、功利主義的には「善くない」帰結を生み出しており、しかもその帰結に対して反出生主義という功利主義でもって対処しようとしているわけである。典型的なマッチポンプ構造が浮き彫りになってくる。

15 社会観・人間観の問題

前出のように、功利主義は、思想としては個人的利己主義とは異なる。けれども、社会全体の幸福の総量は、一人ひとりの幸福を足し合わせて算出され则认为るのが功利主義でもある。そうだとすれば、個々人が幸福を追求し、それぞれの幸福の量が増え、不幸の量が減れば、全体の幸福量も増え、功利主義的に善い社会が実現することになる。

つまり、いくら利己主義ではないといってみても、あるいは欲望の抑制を命じることがあるとしても、功利主義は個々人の欲望充足を肯定しているように思えるのである。あるいは、功利主義的価値観の持ち主たちは、幸福最大化という宗教的使命を果たそうとする信者であるかのようだ、といった方がよいかもしれない。森林破壊や気候変動、動物実験、劣悪な環境下で生育される家畜などの異種への危害は、この幸福最大化という宗教的使命の産物でもある。こうしてここでも、功利主義的滅亡論が人類滅亡を語るときの根拠自体が、功利主義によって生み出されていることが浮き彫りとなる。

それにしても、人とは、快樂をより多く求め苦痛をより多く減らそうとすることを最優先事項

とすべき存在者なのだろうか。そのような人間観や倫理観に私は違和感がある。

功利主義は「禁欲主義のように真の事態を隠蔽するようなやり方ではなく、もっと率直に人間の真のありように基づいて、快楽や幸福は善いのであり、苦痛や不幸は悪い、という主張を首尾一貫して展開しようとする」(一ノ瀬、同：128-129)ところに、その特徴があると一ノ瀬はいう。この引用文にある「人間の真のありよう」とは、一つの人間観を表している。

この人間観は、市場主義的社会で暮らすわれわれの人間観にとってもよくフィットしている。「より多く快楽を得ようとし、より多く苦痛を減らそうとするのが人間だ、どんなにきれいごとをいう人でも、どんなに理想的なことを主張する人でも、本音のところでは、少しでも多く得をして少しでも多く損を減らしたいと思っている」とわれわれの多くが考えているように思えるからである。

功利主義的・市場主義的社会で暮らしていれば、そのような人間観に染まってしまうと、これも多く社会学者が説明するかもしれない。しかしそれは「人間観に染まってしまう」というよりも、功利主義の人間観を選んでいるというべきである。功利主義者が「快楽や幸福は善いのであり、苦痛や不幸は悪い」と感じるのが「人間の真のありよう」だと主張するのも、それを「人間の真のありよう」と捉える人間観を選択しているからである。少なくとも、実存主義的思想に共感していた時期の社会学者 P. L. バーガー (1961, 1963=2017) なら、そう答えただろう¹⁰。

この時期のバーガーは、社会という客観的なものに人が取り囲まれているとする「監獄」イメージと、社会が教え込む価値観を内面化した人々が役割遂行を通して客観的なものとしての社会を作るとする「人形芝居」イメージを、社会学の代表的な社会観としながらも、第三の社会観を提示する。それは「ドラマ」イメージである。

社会をドラマとみなす視点を支えるのは、「エクスタシー」という意識あるいは態度のあり方である。それは「社会の自明な日常の外側に立つということ、あるいは踏み出す(文字通りの *ekstasis* [わきに立つ])ということ」であり、エクスタシーによって「所与性は可能性となる」(Berger, 1963: 157=2017: 223 傍点原著者)とバーガーはいう。

「人形芝居」イメージの社会観には、人とは与えられた役割を信じきって、その役割を遂行する以外に選択肢があることに思い至らない「人形」だという人間観が組み合わさっている。この社会観・人間観では、役割は人間にはどうしようもない所与というわけである。

しかしじっさいには、人は与えられた役割から心理的に距離をとり、その役割を生真面目に果たすことをしない場合がある。与えられた役割を指示通りに遂行しないことも可能である。つまり、ある人にある役割が与えられたとしても、その役割はその人にとってどうしようもない絶対的所与ではなく、一つの可能性にすぎなくなる。

このような人間的事実を考慮に入れれば、人は「人形」というより、与えられた役割に対して様々な態度をとり様々な演技方(演技しないという選択肢含む)をする可能性を秘めた「役者」とみなすべきであろう。だから「人形芝居」ではなく、舞台上で役者が演じる「ドラマ」として社会

を描く方がより適切だと、バーガーは考える。「われわれは人形芝居とわれわれ自身のドラマとの決定的相違を把握する。人形たちと違って、われわれには自分たちの動作をやめて自分たちを動かしてきたからくりを見上げ認識するという可能性が残されているのである。この行為にこそ自由への第一歩があるのだ。そして、この同じ行為のうちに、われわれはヒューマニスティックな学問としての社会学の最終的かつ決定的な正当化を見いだすのである」(Berger, *ibid.* 199=286)。

このことは役割についてだけでなく、社会観や人間観についても当てはまる。社会や人間を観察した結果、自然に「人間の真のありよう」をわれわれが認識したわけではない。また、社会には多様な社会観・人間観が流通している。現在は功利主義的な社会観・人間観が大勢を占めているとはいえ、義務論的なものや徳倫理的なもの、共同体主義的なものも存在する。たとえば、人と異種の動物とはかなり似通っており、とはいえ本能によって行動が決められている異種とは違って、いくつかの行為の理由を思い浮かべながら最善の理由に従って行為する理性を人は持っている。また他者を助ける／他者に助けられるという相互依存的なネットワークを公共善として築いてきた経緯もある。このように人を「依存的な理性的動物」(MacIntyre, 1999=2018)と捉える人間観こそが「人間の真のありよう」を表していると、徳倫理的・共同体主義的立場の人たちなら主張するだろう。もちろんこの人たちは、徳倫理的人間観を自ら選んでいる。

初期バーガーや私のこういった議論も一つの人間観に基づいている。実存主義的人間観である。サルトルが用いた表現をバーガーも繰り返すように、人は「自由へと呪われて」いる(Berger, *ibid.* 165=234)という人間観である。それはバーガーもいうように、ヒューマニスティックな学問として社会学を見る社会学観でもある。

滅亡論を検討してきた本稿は、実存主義的人間観とヒューマニスティックな学問としての社会学という社会学観に立ち返りたい。それは自由の可能性を持つことこそ「人間の真のありよう」とみなすことを選ぶ立場である。またそれは、滅亡論に取り組んできた末にメイが提起した問い、「これからどうするつもりなのか、どのような人でありたいのか」という問いを共有する立場でもある。とはいえ、この立場は帰結主義的な論点を無視するわけではない。選択の結果を考慮に入れて選択をおこなうが、予期した結果になるかどうかはわからない。それでも選択せざるを得ないし、自分が選択したことへの自覚や、その選択の責任を引き受けなければならないと考える。

古臭いのだろうが、初期バーガーにならって実存主義的でヒューマニスティックな社会学を、ポストヒューマンの時代にいかに展開していくかを、今後の課題としていきたい。たとえば、実存主義がいう「自由」と、功利主義的で市場主義的な現代社会に浸透する「自己決定・自己責任論」との違いは何か、個人化論とどういう点が異なるのか、人間中心主義ではないヒューマニズムはどのようにして可能なのか、ポストヒューマン論を踏まえたヒューマニズムの内実とは何なのか、どのような人間的事実を所与的条件とみなすべきなのか、といった問いに答えていき

い。

注釈

- 1 人類は滅亡していないものの、人類に代わって異種の生物が支配する世界を描くジャンルがある。たとえば、かつて人類が占めていた地位を類人猿が引き継ぎ、人類は類人猿によって奴隷のように扱われる世界を描いた、映画『猿の惑星』シリーズが、このジャンルに相当するだろう。このジャンルも、人間中心主義批判をねらいとする滅亡論の一つのあり方だと考えられる。
- 2 人類の滅亡や「人間以後」を仮想しながら現在を問う場合に、いくつかの変種がある。一つのタイプは、人類滅亡の到来を少しでも遅らせるためには今人類は何をすべきかを問うタイプである。新実在論の立場からポストヒューマン論を展開するものには、このタイプが多いように思われる。反対に人類滅亡の促進を主張するタイプもある。その代表が、本文で論じる D. ベネター（2006=2017）の反出生主義である。
- 3 ベネターは他のタイプの反出生主義として、子ども嫌いを理由とする反出生主義をあげ、自分は、「存在し得る子どもやその子たちが大人になったときの苦しみを避けるという気遣い」（Benatar, 2006: 8=2024: 16）を理由とする反出生主義だと述べている。つまり本稿の用語を使えばベネターは「未在者危害回避型」に相当する。ベネター自身は「未在者危害回避型」という表現を使っているわけではないが。
- 4 訳者によると、訳文では good を文脈に応じて「良い」と「善い」の訳語を使い分けているとのことなので、引用文に関しては「良い」と「善い」が出てくるが、私の地の文に関しては「善い」「善さ」を採用している。ベネターの訳書の訳注 p.229 を参照のこと。
- 5 ポリアンナ原理 Pollyanna Principle とは楽観主義へ向かう傾向で、嫌だったことよりも好かったことを思い出したがる傾向のことである（Benatar, 2006: 64-65=2024: 71）。
- 6 ウン・ボリたちが「害」を社会からなくすための活動をしているかどうかは不明だが、たとえば気候変動の原因となる温室効果ガスの排出を厳しく取り締まろうとしない政府や排出を止めようとしない企業という「害」を取り除くために、「No Future, No Children」運動のような反出生主義的な活動をする人々がいる。『私は子どもを持つべきか？ ～気候危機世代のためらい～（原題：The Climate Baby Dilemma）』2024年1月19日放送、E テレ。
- 7 とはいえ、反ユダヤ主義のように過激な言動をベネターがすることはない。いわば高みの見物をしているような態度がベネターからはうかがえる。「宇宙の視点」から「永遠の相のもと」で考えるのだから、そういう態度もあたりまえなのかもしれない。
- 8 このように市場化が進行する社会を市場社会と呼び、それが公共善を腐敗させる効果を及ぼしているとして批判する論者に、政治哲学者のマイケル・サンデル（2012=2014）がいる。
- 9 ここでは母親の苦痛を考慮に入れなかったのが、単純に全体としての幸福量が増えるとはいえないが、母親が気づかないうちに犯行が完遂したなら、幸福の総量は増えることになるかもしれない。
- 10 のちにバーガーは、実存主義的な自由を称賛する立場から、社会秩序の重要性を主張する立場に変化したと述べている（Berger, 2001: 191-192）。その理由として、トーマス・ルックマンとの共著『現実の社会的構成』の執筆に取り組んだ経験や、たんに年を重ねてきたことをあげている。

参考文献

※（ ）内の数字は原著の発行年

Benatar, David, 2006, *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford University Press（小島和男・田村宣義訳『新訂版 生まれてこないほうが良かった』すずさわ書店、2024）

Berger, Peter L., 1961, *The Precarious Vision: A Sociological Looks at Social Fiction and Christian Faith*, Greenwood Press

———, 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Penguin Books（水野節夫・村山研一訳

- 『社会学への招待』ちくま学芸文庫、2017)
- , 2001, Postscript, in Linda Woodhead with Paul Heelas and David Martin ed. *Peter Berger and Study of Religion*, Routledge, pp.189-198
- 『現代思想 2019 年 11 月号 特集 反出生主義を考える——「生まれてこないほうが良かった」という思想』青土社
- 一ノ瀬正樹、2016『英米哲学史講義』ちくま学芸文庫
- 、2024『ためらいと決断の哲学 ゆらぎゆく因果と倫理』青土社
- ジェイムズ、P. D.、1999 (1992)、青木久恵訳『人類の子供たち』ハヤカワ文庫
- May, Todd, 2024, *Should We Go Extinct?: A Philosophical Dilemma for Our Unbearable Times*, Crown Publishing
- MacIntyre, Alasdair, 1999, *Dependent Rational Animals: Why human Beings Need the Virtues*, Open Court (高島和哉訳『依存的な理性的動物 ヒトにはなぜ徳が必要か』法政大学出版局、2018)
- 逆巻しとね、2019「未来による搾取に抗し、今ここを育むあやとりを学ぶ」、『現代思想 2019 年 11 月号』所収、pp.209-221
- Sandel, Michael J., 2012, *What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets*, Farrar, Straus and Giroux (鬼澤忍訳『それをお金で買いますか 市場主義の限界』ハヤカワノンフィクション文庫、2014)
- サルトル、ジャン・ポール、1956 (1954)、安堂信也訳『ユダヤ人』岩波新書
- Scheffler, Samuel, 2013, *Death and the Afterlife*, Oxford University Press (森村進訳『死と後世』ちくま学芸文庫、2023)
- 八塚顔高、1995「みんなの願い」、星新一編『ショートショート of the 広場 8』講談社文庫、1997、所収、pp.115-118